



体外式超音波検査では、急性腹症の原因診断や肝・胆・膵といった臓器のエコー診断だけでなく、技術的に難しいといわれる消化管のエコー診断も行なっている。



高解像度食道内圧検査は食道内にカテーテルを挿入して食道の動きを測るもの。同検査により、喉から食道、胃の入り口までの一連の動きを連続的に記録できる。

Central inspection department



眞部 紀明 教授
Noriaki Manabe

■ 専門分野

神経消化器病(機能性消化管障害の病態と治療)、消化管超音波医学、小腸疾患における診断と治療、酸関連疾患の病態と治療

■ 専門医・認定医・指導医

日本内科学会認定医、日本消化器病学会消化器病専門医・指導医、日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医・指導医、日本消化管学会胃腸科専門医・指導医、日本消化器がん検診学会認定医、日本食道学会食道科認定医、日本超音波医学会超音波専門医

休日も出張などがあって、なかなかゆっくりする時間がないのですが、最近健康のためにスミミングを始めました。といっても週1回くらいですが(笑)。体も軽く、気分転換にもなりますね。



中四国エリアで「機能性消化管疾患」の総合的検査ができる医療施設は限られている。

医療最前線

»» vol.60

川崎医科大学総合医療センター
中央検査科

Report!

急増する「機能性消化管疾患」 各種検査法で適切な診療を

近年、患者数が増え続けている機能性消化管疾患。

一般的にはあまり認知されていませんが、近年わが国の消化管疾患のタイプに変化が生じているといわれています。具体的には、かつて多かった消化性潰瘍などの「器質的疾患」よりも、消化管アレルギーを含めた「機能性消化管疾患」の割合が増えてきているのです」と話すのは眞部紀明教授。「機能性消化管疾患」をはじめとする神経消化器病の病態検査・治療などを専門とし、当科の部長としてチームを率いている。

「機能性消化管疾患」は、一九九〇年ごろからアメリカの消化器病学会で提唱されるようになった比較的新しい概念で、胃痛や胃もたれ、下痢、便秘を繰り返すといったさまざまな症状が慢性的に続いているにもかかわらず、内視鏡検査などで異常を認められないものがそう呼ばれている。おもな疾患としては「非びらん性胃食道逆流症」や「機能性ディスペプシア」、「過敏性腸症候群」「慢性便秘」など。

その要因について眞部教授は「生活上のストレスをはじめとした心理的・社会的要因と関係があるとされています。また食生活の欧米化も要因のひとつに挙げられています」。

胃痛や胃もたれ、下痢、便秘などの症状が週一回以上起こり、かつ症状が半年以上続くようなら、「機能性消化管疾患」の疑いが考えられる。症状を自覚したら早めの検査が必要だ。

各種検査法を駆使した診療で患者の想いに応える。

これまで内視鏡検査や体外式超音波検査、消化管造影検査などを幅広く手がけてきた眞部教授。

「がんなどの器質的疾患の除外は必須ですが、より侵襲の少ない検査で除外するのが、理想的です。当科では、体外式超音波検査で病変部位を想定したのちに、内視鏡検査を組み入れるなど患者さんにとって可能な限り負担が少なく、効率的な検査法を採用するよう努めています」。

「機能性消化管疾患」の診療は、日本消化器病学会からも各種診療ガイドラインが作成され、近年注目が高まっている。しかしながら中四国圏では、検査が十分にできる医療施設が限られているのが現状だ。二時間インピーダンス、pHモニタリングをはじめ各種検査法が可能な当科。なかでも高解像度食道内圧検査は、上部消化管内視鏡や食道造影と組み合わせることで診断精度が向上し、質の高い医療が提供できる。

最後に医師としての心得。「患者さんの痛みを少しでも和らげたいです。また新しい治療法を吸収する向上心、謙虚さと優しさをもち続けることです」。患者さんの気持ちに寄り添った適切な診療という目標に向かって、眞部教授の研鑽の日々は続く。

お問合わせ

川崎医科大学総合医療センター
岡山市北区中山下2-6-1
☎086-262-2111
<https://g.kawasaki-u.ac.jp>